

守
破
創
対談

2020年に開催される東京パラリンピック。日本パラリンピック委員会会長として東京パラリンピック開催の陣頭指揮に立つ鳥原光憲氏に、パラリンピックの発展の歴史や障がい者スポーツの魅力、込められた思いを語っていただいた。そこからは、障がい者スポーツのレベルの高さと活力ある共生社会の創造に向けた新たな視座が見えてきた。



日本銀行政策委員会 審議委員

石田浩二

Koji Ishida

1947年神奈川県生まれ。70年(株)住友銀行入行。有楽町支店長、資金為替部長、常務執行役員企画部長、(株)三井住友銀行常務執行役員経営企画部長、常務執行役員本店第一営業本部長、(株)三井住友フィナンシャルグループ代表取締役常務取締役、代表取締役専務取締役、三井住友ファイナンス&リース(株)代表取締役社長などを歴任し、11年より現職。

東京パラリンピックが目指す 活力ある共生社会



公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 会長
日本パラリンピック委員会 会長
東京ガス株式会社 相談役

鳥原光憲

Mitsunori Torihara

1943年東京都生まれ。67年東京ガス株式会社入社。取締役原料部長、常務取締役、取締役兼常務執行役員 企画本部長、代表取締役兼副社長執行役員、代表取締役社長兼社長執行役員、取締役会長、取締役相談役などを歴任。11年、財団法人(現公益財団法人)日本障がい者スポーツ協会会長、日本パラリンピック委員会委員長、14年同委員会会長。

大きく発展してきた
パラリンピック

石田 今日、日本パラリンピック委員会の鳥原光憲会長に、二〇二〇年の東京パラリンピックについて伺いたいと思います。まず、二〇一三年のIOC総会で東京でのオリンピックとパラリンピックの開催が決まったときのお気持ちは、どうでしたか。

鳥原 障がい者スポーツの振興については社会の成長のためにパラリンピックを開催する意義は非常に大きいと思っていましたので、東京で、と決まったときには、正直「チャンスに恵まれた」と、うれしかったですね。半世紀に一度あるかどうかというチャンスでしたし。
石田 私たちの世代は、運のいいことに、二回も東京でオリンピック・パラリンピックを見ることができました。これまでパラリンピックは、どのように発展してきたのでしょうか。

鳥原 第一回のパラリンピックは、一九六〇年のローマオリンピックの後に開かれました。パラリンピック発展の歴史を振り返ると、大きく三つのポイントがあります。



1964年東京パラリンピックのポスター
 (©日本障がい者スポーツ協会)

一つ目は、その発祥です。そもそも障がい者スポーツは、一九四四年にイギリスのストーク・マンデビル病院で、第二次世界大戦で脊髄損傷した兵士のリハビリと社会復帰のためにスポーツを取り入れたところから始まっています。そして、この病院では、一九四八年のロンドンオリンピックに合わせて、病院内で車いすアーチェリーの競技大会を開催したんです。これがパラリンピックの発祥と言われています。その後、一九六〇年にはローマで二三カ国が参加した国際大会に発展し、これが後に第一回パラリンピックと呼ばれるようになり、第二回が東京で開催されました。

二つ目は、パラリンピック自体

の成長です。最初は車いすの人の競技のみでしたが、手足の切断、脳性麻痺、知的障がい、視覚障がいなど、いろいろな障がいの人たちの競技に広がっていき、今のような姿になったのです。

三つ目は、オリンピックとパラリンピックの統合開催の流れです。一九八八年のソウル大会からこの動きが始まり、二〇〇八年の北京大会が、オリンピックとパラリンピックを統合した最初の大会でした。開催都市や競技場だけでなく、組織委員会も、スポンサーも、全て同一になり、一体のものとして開催、運営されることになりました。

石田 それは大きな変化ですね。スポンサーは、二つの大会共通のスポンサーになるということですか。

鳥原 共通です。統合化はパラリンピックにとつては大きな力になりました。このような変化の中、一九六四年の東京大会から比べても、パラリンピックそのものが年を重ねてきただけでなく、競技の幅を大きく広げ、かつオリンピックとの統合開催も実現し、大会の運営の仕方が随分大きく違ってき

ています。

石田 先ほど、障がい者スポーツにとつて二〇二〇年の東京大会開催の意義が大きいとおっしゃったのがよく分かります。東京大会が楽しみです。

エリートスポーツとしてのパラリンピックの魅力と力

鳥原 パラリンピックの意義という点では、障がい者が行うスポーツということではなく、最先端のエリートスポーツとしての魅力もあることを強調しておきたいと思います。パラリンピックは、障がいの種類や程度によってクラス分けをし、いろいろな競技を行うのですが、例えば、陸上競技の男子一〇〇メートルで両足義足をつけて走る種目では、世界記録が一〇秒五七です。今、健常者では九秒台の時代ですが、すごい記録です。

石田 それは存じませんでした。

鳥原 男子の走り幅跳びの片足義足という種目では、去年、八メートル二四という世界記録が出ました。健常者による一般の走り幅跳びの世界記録は、八メートル九五

ですから、追いつきそうな勢いです。マラソンの場合は単純には比較できませんが、健常者の世界記録が男子で二時間二分五七秒に対して、車いすマラソンの世界記録は、男子で一時間二〇分一四秒、女子は一時間三十八分〇七秒です。女子の世界記録は、日本の土田和歌子さんが持っています。彼女らは時速三〇キロを超えるスピードで走るわけです。

石田 先日行われたボストン・マラソンも車いす部門がありました。普通のマラソン大会でも車いす部門があるのでしょいか。

鳥原 はい、今は、多くの都市のマラソンで、車いす部門があります。車いす競技には、バスケットボールやラグビーなど、非常に激しい競技があるほか、車いすテニスでは、ご存じのように、国枝慎吾選手が二〇〇七年から世界ランキング一位で、多くのメジャー大会を制覇しています。

車いすテニスの場合には、ツーバウンド以内で返すというのが、通常のテニスと唯一異なるルールなのですが、彼は、ワンバウンドで七割くらい返しているのです。それが強さの一番の要因だと思

ます。このように、パラリンピックのスポーツは、エリートスポーツとしての魅力も非常に大きいと思います。

石田 まさに障がいの範疇を超え、普遍的な形で人間の限界に挑むエリートアスリートの姿ですね。

鳥原 自分の残された機能を最大限に発揮して限界に挑戦するアスリートの姿に、見る人は感銘を受けるし、勇気を与えられますよね。そうしたことを通じて、障がい者に対する社会の見方とか、障がいそのものに対する見方が変わっていきます。障がいというのは、決して不可能ということの意味するものではありません。障がいのある人も、自分の機能を発揮できる環境があれば、不可能なんていうのではないのだと社会の認識が変わっていきます。これがパラリンピック特有の価値だと思っております。

パラリンピックの一番大きなレガシー、後世に残る財産は、特に開催国の社会において障がいに対する見方が変わり、社会にあるハード・ソフト両面のさまざまなバリアが認識され、社会全体のバリアフリー化が進んでいくことです。

石田 障がいというのは個性とし

て受けとめていくべきであるというところを鳥原会長はおっしゃっておられますね。

鳥原 その通りです。人は顔かたちが違う、体形も違い、個性の違いがあるように、障がいがあるということも一つの個性です。そういう人たちも分け隔てなく、しっかりとチャンスが得られるような社会をつくっていくかなければいけません。現実には、いろいろなハードとソフトのバリアがあり、障がい者の可能性を妨げています。それを徹底的に見直して、障がい者も可能性を同じように発揮できるような社会、それは共生社会ともいい、インクルーシブ（違いを包容する）な社会ともいいますが、そういう社会をつくっていく必要があると思えます。パラリンピックの一番大きなレガシーは、そうした社会を形成していく大きなきっかけになるということだと思います。

障がい者スポーツの裾野を広げ、山を高くする

石田 鳥原会長は、日本パラリンピック委員会の母体である公益財

団法人日本障がい者スポーツ協会の会長でもあります。障がい者スポーツ全般についての理念やビジョンについては、どのようにお考えですか。

鳥原 スポーツの価値は、全ての人に共通するものであり、全ての人が享受できるようにする、というのが基本的な考え方です。そして、障がいのある人がスポーツをやることによって自立し、また社会参加をしていくことが、障がい者スポーツの理念です。さらにいえば、障がい者が、スポーツを通じて自立し、社会参加していくことによって、活力ある共生社会の創造に貢献していくことが目的でもあります。

ビジョンには二つの方向があります。障がい者スポーツの普及拡大を図ることと、競技力の向上を図ることです。障がいのある人が身近なところで日常的にスポーツを楽しめる環境をつくり、スポーツの裾野を広げるとともに、世界で日本のアスリートたちが活躍できるレベルに競技力を向上させていく、この両方の活動をバランスよく進めていくことが目指すべきビジョンです。

石田 底辺を広げ、頂上を高く持つていくことによって、ピラミッドのように障がい者スポーツを発展させていく、ということですね。

鳥原 ええ。日本選手が世界で活躍すれば、国内でその競技への関心が高まり、参加しようという人たちが増えますよね。山を高くすれば裾野が広がるし、逆に裾野を広げないと山も高くなりません。その両面の活動をバランスよく進め、好循環させていくことが大切です。

石田 身近なところでスポーツをする施設が必要です。施設のバリアフリー化もどんどん進める必要がありますね。また、障がい者ス



車いすマラソン女子で世界記録をもつ土田和歌子選手
(©越智貴雄)



石田 鳥原会長は、企業人として

人間は 体を動かすことで考える

スポーツを指導できる人を増やすことも大切ではないでしょうか。

鳥原 おっしゃる通りで、裾野を広げるには地域のスポーツ施設も指導者も不十分です。また、山高くするには、専門的なトレーニング環境をもっと整えなければいけません。そのためには施設面のほか、指導者や医学的なバックアップも必要です。しかし、現在各競技団体、指導者、事務局のいずれも、ボランティア活動がベースで、経済的基盤が弱く、人材も少ないのが実態であり、こうした競技団体の体制強化が大きな課題です。加えて、現役時代、セカンドキャリアの両面で、アスリートの安定した雇用を確保するといった対策も必要です。

「ご活躍されるとともに、アスリートとしても、東京ガスのサッカー部の選手として活躍され、また監督、部長を務められました。それが、現在のJリーグのFC東京にもつながっているとお聞きしております。そうした経歴を持たれている会長のスポーツに対する思いをお聞かせいただけますか。」

鳥原 そもそもスポーツは、人間の本源的な体を動かすという欲求の一つです。そして、精神的な充足をもたらしめます。

石田 達成感とか、満足感とか、連帯感とかですね。

鳥原 スポーツは、精神的な充足を得られ、喜びとか楽しみとかを得られるという意味で、スポーツ文化と呼ぶにふさわしい、創造的な文化だと思います。スポーツによって人間形成や人格形成ができるし、スポーツを通じて、多様な人との親交や交流ができる。チームワークも学べるし、忍耐力もつく。本当にいいところがたくさんあると思います。活力ある社会をつくるために、スポーツは非常に大きな力があると思います。

変な言い方ですけども、人間は体を動かすことで考えるという

面があると思います。飛んでくるボールを落下点に走っていったら、それは、五感と脳、それから筋肉など、身体の総合的な学習効果の結果です。その積み重ねにより、バランスのとれた人間の成長があるのだと思います。人が健全に成長し、活力ある社会していくためには、スポーツは非常に重要な役割を持っています。

「最も危険なことは、低い目標を達成すること」

石田 最後に、今の時代の若い人にかか一言お願いしたいと思えます。

鳥原 いや、僕はそういうのは一番苦手なんです。

石田 すみません、私も苦手なんですが。

鳥原 アドバイスとは少し異なりますが、頭の中に忘れないでいる言葉の一つは、ミケランジェロが残したとされている言葉です。「最も危険なことは、目標が高過ぎて失敗することではなく、低過ぎる目標を達成することだ」というものです。

石田 なかなか厳しい言葉ですね。

鳥原 ミケランジェロがどういう

状況で述べたのかまでは、わからないのですが、ルネッサンスの巨匠の挑戦心を感じる言葉です。最近、この言葉を国際パラリンピック委員会の資料でも目にしました。パラリンピック開催のレガシーの大きさは、目標・計画実行の中途次第で決まるといふ説明のところに引用されていました。

石田 振り返ってみると、心当たりがある、含蓄に富んだ言葉ですね。目標が低いと、少々の努力で達成できてしまい、それ以上に伸びることはなくなってしまう。

鳥原 スポーツに限らず、並大抵の努力では届きそうもない目標に向かって挑戦したほうが、人は成長できるし、予想以上にいろいろな副産物が生まれてくるということがありました。高いところからアドバイスするような話ではないのですが、このミケランジェロの言葉は、挑戦を勇気づけるような言葉だと思います。

石田 東京パラリンピックを機に、我々が感じ、考えるべきことはたくさんありますね。東京パラリンピックの成功を祈念しております。本日は、ありがとうございました。